

## 貞慶の法相唯識

藤ノ原惠行

貞慶の弥勒信仰と弥陀信仰

今期、自分の課題として解脱房貞慶を学んできたのだが、最初は『興福寺奏状』や『愚迷発心集』を手がかりとして法然の専修念仏を批判した貞慶が、どのような思想を持っていたのかを尋ねてみた。そして後に『貞慶講式集』『唯心念仏』『観心為清浄円明事』等や諸氏の論文を読むことを通して、貞慶の属していた法相唯識の伝統として彼が弥勒信仰を持ち、兜率天往生を願っていたことを学んだ。同じ「往生浄土」というのではあるが、その内容は法然の専修念仏とは大いに異なるものだった。法然を批判した明恵と同じく旧仏教側の教えとしては当然、法然が諸行として否定した「発菩提心」が重要な要素であり、念仏も専修念仏ではなく唯識観をもって実践の方法とするというものである。また、『唯心念仏』では華嚴宗とも親しい教えであること、『観心為清浄円明事』では真言宗とも親しい教えであることが理解できた。『興福寺奏状』で「八宗同心」と言ったのも本当にそうだったのだと思わせた。

特に『観心為清浄円明事』は死の十六日前に口述筆記させたも

のである。法然の『一枚起請文』と同じように貞慶の最晩年の思想ということが出来る。その中では、聖道門らしく題号の通りに、心を観じてその清浄円明なることを自覚することを勧める。真言宗の月輪観と同じく法相宗にもそのような教えがあるとして、衆生の心の本性は清浄円明の如来蔵であり、それを観することによって、本来を取り戻すのである。

また、西方浄土への信仰を告白してその手前の観音菩薩の補陀落浄土に往生しようとしているらしい。弥勒浄土往生からの心変わりかと思われるが、唯識の学匠の多くは兜率往生と同時に弥勒浄土往生も願っていたのであって、貞慶自身にとっては矛盾を感じてはいないようである。臨終に当たって、聖衆来迎の瑞相を見て後に希有の心を発すことを真実の正因正業であるとし、大乘希有の心つまり菩提心を発して後に浄土往生すべきことを説いている。

『観心為清浄円明事』の中で一番気になるのは、「冒地は菩提也。質多は縁慮心也。縁慮の心は其の性、本より浄なり。即ち是れ菩提大覚の体也」というところである。「縁慮心」とは「慮知心」のことであり、信巻の『止観』の一に云わく、「菩提」は天竺の語、

ここには「道」と称す。「質多」は天竺の音なり、この方には「心」と云う。「心」はすなわち慮知なり。」とよく似ている。菩提心と云うことについて親鸞と貞慶は、ほぼ同じ理解をしているのではないかと思われる表現である。

### 鎌倉期の法相唯識の特徴

法相唯識の教えを学ぶとき、先ず勧められるのが良遍の『観心覚夢鈔』である。山崎慶輝「鎌倉期に發揮された唯識説」(『鎌倉仏教形成の問題点』所収)によれば、法相唯識というと、第一に浮かぶのは五性各別説であり、五性の中に成仏できない無性有情や定性二乗が存在し、そのため唯識は三乗教であるとか、大乘であっても一段低い権大乘であるとされてきたのであるが、鎌倉時代になると、中国の法相宗に見られない教学が現れて、それを主張した代表者が良遍である。『真心要決』や『伝通要録』の中ですべての者が成仏できるという一乗説が唯識の立場からでも説けると明言している。このことは、伝統の法相唯識の立場からは大きな方向転換で、平安朝の最澄と徳一の論争、或いは応和の宗論の良源と仲算の論争において、法相宗の学者が五性各別を固執し、一乗説を非難した態度に較べて、一八〇度の転換である。そして、それらの主張が専ら良遍の発想であるかというところではなく、既に貞慶にその源泉が見られる(取意)。

勝又俊教『唯識思想と密教』によれば、貞慶は藏俊・覚憲と伝えられた興福寺の法相教学の正統を継承した学者であり、彼の著作には、法相教学の伝統維持に努めたものや、教学の組織化に努めたものや、あるいは教学上の要点を簡略に述べたもの等、多数あるが、しかしそれらの著作の中に断片的ではあるが、従来の伝統教学の立場を超えて、諸宗と和合し、新時代の教学に即応する態度が認められるのである。

最も特徴的な一つを挙げると五性各別思想と法華一乗思想とを和合せしめようとする主張である。即ち『法相宗初心略要統篇』の中の「五性各別事」の項の中で、

諸教の諸説は皆真実也。一乗は即ち五性乗を許す、三無性門の諸説也。五性は即ち一乗に会す。五性は三性門の施設也。

是の如き和会は更に私案を立つるに非ず、源は深密(解深密經)無自性品に起るなり。

という。これは既に平安初期以来わが国の天台宗と法相宗との教学論争の問題点となっていた五性各別思想と一乗皆成思想とを融合して、この論争に終止符を打とうとしたものである。貞慶はその思想的根柢を『解深密教』の無自性相品に求めたのであって、決して勝手な私案でないと言明している。良遍は貞慶の孫弟子に当たり、鎌倉期における唯識教学の新展開は、貞慶の蒔いた種が良遍によって花開いたようなものである(取意)。

貞慶と良遍は「唯識即大乘仏教」の信念によって一乗思想の吸

収をはかり、法相唯識こそ最も優れた大乘仏教であると主張したのである。

### 法相唯識と浄土真宗

貞慶のことを学んでいる中で、法相唯識のその後のことが浮かんできた。貞慶の内に芽生えた新しい唯識がどのようになったのだろうか。結城令聞「江戸時代に於ける諸宗の唯識講学とその学風」(『結城令聞著作集』第二巻所収)によれば、興福寺の法相唯識の教えは、その後仏教の基礎学として他宗に伝えられ、興福寺はその本家として権威を誇るが、後にはそれぞれの宗派において、唯識学が発達し、本家としてはあまり顧みられなくなっていった

### 心は清浄にして円明たる事を観ず

問ふ。真言教の中に月輪観有り。微妙甚深にして大功德有りと云々。法相にも亦此の証有りや。答ふ。未だ正文を見ざれども、義勢は無にあらざるか。其の証に云く、仏果の功德を説くに多く円明と云ふ。謂ふ所、或は性浄(自性清浄)円明の故に無漏と名くと云ひ、或は引極円明純浄本識(阿黎耶識)と云ふ等、是なり。円は円満なり。万徳欠ける事なき故に。明は明浄なり。性用は無垢なるが故に。宛も世間の満月の如し。

問ふ。仏果の理智は障を出すのが故に円明しかるべし。凡夫の妄心は常に煩惱を具す。亦一徳も無し。何ぞ之を観じて清浄と為し、円明と為すや。答ふ。理性の清浄は凡聖の位に通ず。本来自性清浄は涅槃の義なり。依の方に成ず。故に論に云わく。客染有りと雖も本性は浄にして、無数量の微妙の功德を具す等と云々。只自性清浄ならず。又無数の功德を具す。円明の二義詳しく此の文に在り。又勝鬘等は如来

のである。新義真言宗の智山派・豊山派に伝わり発展した唯識教学は、江戸期には本派も大派も智豊両山(主として豊山)に多くの留学者を出して学び、帰山して自派内での講学に勤め、共に唯識の学問として盛んになっていった、と言う。

現在においても『成唯識論』は学ばれている。しかもそれを批判的に捉えるということはないようである。仏教の基礎学として、浄土真宗においても大事なものとして扱われてきた。しかし、法然や親鸞を批判した貞慶の思想が、日本の唯識学の底に流れているのである。そこには何の問題もないのだろうか。気になることであり、これからの課題として行くつもりである。

以下に『観心為清浄円明事』を書き下してみた。

藏を説く。則ち在纏位（煩惱に覆われた如来藏）は衆徳を具すの義也。次に智に於て之を論ずれば、無漏の種子法爾として具足す。惑障有りと雖も之を染ずること能わず。本性住（先天的に種子の存するもの）性則ち是れ也。

問ふ。無漏の種子は設ひ淨の義有りと雖も、凡位にては未だ現行を生ぜず。其の相顕れず。今何ぞ妄染心を以て清淨と為すや。答ふ。有漏心に寄りて無漏の種子を觀ずる。是れ亦、違無し。只未だ現行せずと雖も、因既に微妙なり。諸大乘教に之を名づけて仏性と為し、之を稱して如来と為す。因に於て果を談ずるは、聖教の常説也。凡そ因と云ひ果と云ひ、不一不異なり。又現在心の上に過去未來を立つる。現在世を離れて過未有ること無し。大乘の因果は深妙にして言を離る也。仏智の前に凡夫心を照さば、本来清淨にして仏と異なること無し。相性不二にして性を離れて相無し。因果は不異にして因を離れて果無し。故に涅槃經に乳酪の喩を説く。人、乳家に到りて問ひて云はく、酪有るや。答へて云はく、酪有り。是れ即ち乳を指して酪と為す。現れずして既に有り。人、仏性を具す。知るべきこと亦爾り。經意なり。小島僧都二つの釈を作す。但だ事の淺なるを挙げて其の理性を觀じて本義と為すか。仍ち世の満月を以て喩と為す。之を觀ずるに過ぎたるは無し。但だ世間の日月は器界（器世間）の摂する所也。一切の器界は、諸の有情の共業の感ずる所也。我が第八識は恒時に之を変ず。頼耶の相分也。相を摂して心に帰すれば既に心中に在り。觀念尤も応ずるか。但だ子の如き愚人は觀念に堪えず。只心を以て心を繋ぐと想ふ。我が心清淨にして猶し満月の如ければ、分別は漸少し散乱は聊止せむ。心清く身涼きは滅罪の源と為るか。又眞言を誦すべし。功力広大の故也。冒地は菩提也。質多は縁慮心（慮知心。外界の対象を縁として思慮する心）也。縁慮の心は其の性、本より淨なり。即ち是れ菩提大覺の体也。

問ふ。眞如は無相也。何ぞ有相の月輪を以て無相の理を觀ずるや。答ふ。凡夫の心行は頓に無相の理に入ること能はず。故に有相中に此の相少しく無相に近し。衆物と衆色無きが故に。此の如く漸漸に遂に無相に入る。譬へば息を数へるが故に定を得るが如し。重ねて意を云ふに、初め息を数へるは猶ほ散心の如し。散心の中の稍<sup>すこ</sup>しき寂靜遂に定位に住す。心地觀經に云はく、凡夫の觀ずる所の菩提心の相は、猶ほ清淨円満の月輪の如し。胸憶の上に於いて明朗にして住す。若し速やかに不退転を得むと欲すれば、阿練若（人のいない修行處）及び空寂室に在りて、端身正念して前如来金剛縛印（両手を合わせ、指をおのおのに組む印）を結び、冥目して臆中の明月を觀察し、是の思惟を作せ。是の満月輪は五十由旬にして、無垢明淨・内外澄徹・最極清凉なり。月即ち是れ心。心即ち是れ月。塵翳（不淨の翳り）は染まること無く妄想は生ぜず。能く衆生をして身心清淨せしむ。大菩提心は堅固不退なりと云々。菩提心論に經を引きて云はく、若し勢力広増無くば宜しく法を信じ<sup>ひとえ</sup>単に菩提心を觀ずべし。仏説此の中に万行を具して、清白純淨の法を満足す。

出離の道に取りては身の惘然(茫然)として其の法を聞かざるに非ず、ただ其の心の発らざる也。是れ則ち機の教と乖き、与分を望みて之に違ふの故か。心広大の門に入らんと欲すれば、我が性堪えず、微少の業を修せむと欲すれば、自心頼み難し、賢老に遇ふ毎に問ふと雖も答へず。抑も何ぞ法、何ぞ行。浅に似て而も実に深し。大と雖も猶ほ易の如きなるや。易の故に企むべし。大の故に頼むべし。初心の要は之を以て最と為す。而して世間の士女(男女)の云はく、我が心澄み、我が心涼しき矣。虚晴れて月明く、水澄みて影清きは、是れ其の身心清涼の時也。縦ひ水月に向かはずと雖も、閑かに其の形を思ひ、或は其の事を語りて、自ら心を悦ばせしむ。仏法の初門は是の如くあるべし。自心の性は本来清浄円満明朗なり。宛も秋月の如し。適に此の事を聞きて、未だ我が分を隔てず。密教の旨未だ習学に及ばざれど、設ひ目を冥じ印を結ばずと雖も、聊か妙理を思惟すれば、巨益空しからず。顯教の中に正文無しと雖も、義勢は大同なり。語は異にして義は一也。心を此の事に繋ぐは至要一に非ざるか。若し可怖の事を語れば嬰兒聞きて戦き、若し臭穢の相を憶へば腸反りて嘔吐は、人の事において心に感ずるの浅深に依る。

命終に十方仏を見、極樂世界に往生す、又観音正しく無生忍を証するは、此れ呪力也。爾れば彼に云ひ此に云ふは皆不思議の致す所也。仏子六十年の間、空しく過ぐと雖も、若し数輩の同法、多日念誦の間に、或は一時、或は一音、凶らずして我が心に銘すれば、其の徳、又大聖に達すること有り。其の威力を以て、新たに宝山に生まれむ事、何ぞ以て難と為さん。若し其の願成ずることは、亦他に非ず。只不思議事と云ふべし。仍ち常に神呪の心を念じて別徳を思はず。総じて不思議に帰し畢りぬ。西方往生は機劣にして土勝る。因軽くして果重し。現に往生の事あり。世を挙げて疑わず。これ只弥陀本願の威力なり。而るに本願を立つるの時は五劫に思惟す。其の思惟はこれを計るに、即ち能く不思議を知る故か。爾らず争か彼の希有の願を發せむや。随て又有行・無行・善人・悪人、輕微の業因を以て聖衆來迎を勧む。聖衆已に現ずれば往生疑いなし。但し真実浄土の業成就は、多く彼の聖衆撰取せる暫時の間に在りや。爾らず、争か最下の凡夫鈍淺の縁を以て忽ちに微妙の浄土に生まれ、永く不退轉の利を得むや。是れ則ち不思議中の不思議也。予は深く西方を信ずるが故に、窃かに此の案を廻らす。学者性相の疑に同ぜず。世人一向の信に同ぜず。恐らくは一期の所作に於いて、以前の称念等は仏を感ずること大なりと雖も、多くはなお疎因なり。真実の正因正業は瑞相を見て後に希有の心を發す。或は略法を開き、或は被むる所に依つて、暫時と雖も大乘の心に住すべし。然る後に正しく浄土に生ずべきなり。其の瑞相不思議と併びて是れ仏宝法宝不思議なり。病席の雑談は多く観音補陀落の事に在り。初心の同法等云はく、此の事廢妄せんと欲す。粗記せしめては如何。答へて云はく、何事有りや。仍ち始め少々先の言を思い出だして書き付けらる人有り。又云はく。或は失し、或は背く、只此の事口筆を以て之を書くべしと云々。其の後臥し乍ら詞を出だす。首尾散散なる

か。又注付の後には自ら未だ之を見ず。氣力の衰へは日に逐ひ、微音の言語分明ならず。定めて其の誤り多きか。此の如きの物、外に在りて流布すれば、人悪氣を生ぜむ。其の憚り一に非ず。之れ如何に為む。

建曆三年正月十七日之を記す

同年二月三日辰の初め御入滅

現行年正月廿二日書写しめ了ぬ

興隆仏法の為 利益衆生の為

欣求浄土 憲縁

『観心爲清淨圓明事』(『解脱上人小章集』『日本大蔵経』第六十四卷法相宗章疏三・二十二頁)

語注

月輪観 密教のあらゆる観法における基礎的な初歩の観法で、直径一肘

(約五三<sup>センチメートル</sup>)の月輪を図し、中に八葉の白蓮華を描き(蓮華の上に月

を描く場合もある)、その上に金色の咒(阿字)を書いた掛け軸に向か

い、足を組んで坐し(結跏趺坐)、手に印を結び、呼吸を整えて、自分

の心が月輪のごとしと観ずる。阿字観は、この阿字を唱え、内観が進

んで阿字と蓮華と月輪との三観が成就し、阿字本不生の理を体得する

観法である。(『広説仏教語大辞典』)

依他起性 因縁和合によって生じ、因縁がなくなれば滅するもの。唯識

説にいう百法のうち、六無為を除く他の有為法のこと。他の力によつ

て生じかつ滅するゆえに、有であつてしかも有でなく、また無でもな

く、これを仮有法・非有似有の法と名づける。この中に虚妄分別の縁

から生じた雑善の法である染分依他と無漏智の縁から生じた純淨の

法である浄分依他とがある。浄分依他は円成実性に属することもあ  
る。(『広説仏教語大辞典』)

阿頼耶識 ……前略…… 阿頼耶識は、通常は迷いの生存の根底として

機能するのである、しかし見道以後は悟りの諸法もまた阿頼耶識から

生ずるとされる。インドにおいても一部の文献では、さらに進んで阿

頼耶識と如来蔵を同一視する考え方も現れており、こういった動きを

受けて玄奘以前の中国では、阿頼耶識の本質は、清らかな真識である

か、汚れた妄識であるかをめぐる論争が生ずることになった。

(『岩波 仏教辞典』)

小島僧都(眞興<sup>ゴロ</sup>、シ) 平安中期の真言宗の学僧、小島流の祖。承平五

(935)〜寛弘元(1004)。**諱**眞興 **通**小島僧都、小島先徳 **生**河内(大阪)

**師**仲算、仁賀 **事** 949年に興福寺に入り仲算に師事して唯識・因明を

修め、のち吉野の仁賀に密教を学び、83年伝法灌頂を受けた。南法

華寺(壺阪寺)に住し、のち小島寺に移って法筵を開いたので、その法流を小島流(壺阪流)という。1003年興福寺維摩会の講師、翌年御齋会の講師となり権少僧都に任じられた。 (『日本仏教人名辞典』)